

題目 偽善者～利他性に関する自己認知と実際の行動の一貫性～

氏名 佐藤恵星

指導教員 高橋伸幸

本研究の目的は、Mazar ら（2008）が提唱した自己概念維持理論を利他性の文脈に応用し、人々が自己報告において示す利他的傾向と、実際の利他行動との一貫性を検証することであった。先行研究では、人は「誠実でありたい」という肯定的な自己概念を維持しながら、小さな不正や逸脱行動を行うことが示されてきたが、自己認知と実際の行動がどのような関係にあるのかについては、十分な実証的検討がなされてこなかった。そこで本研究では、まず Web 調査を用いて自己報告による利他的傾向を測定し、その後、実験室実験において独裁者ゲームでの分配行動および報酬返却行動を観察することで、自己認知と実際の行動の一貫性を多面的に検討した。北海道大学の学部生 111 名を対象に、Web 調査では倫理的行動尺度および日常生活における利他行動尺度を測定し、実験室実験では独裁者ゲームにおける提供額と、実験参加報酬を意図的に 100 円多く渡した際の返却行動を記録した。分析の結果、仮想的な状況における倫理的判断を問う、倫理的行動尺度は独裁者ゲームでの提供額および報酬返却行動の双方に対して統計的に有意な正の影響を示した。一方で、自分が過去に実際にどう行動してきたかを問う、利他行動尺度はこれらの行動を予測しなかった。この結果は、規範的な自己概念と記述的な自己概念が、異なる心理的機能を持つ可能性を示唆している。また、独裁者ゲームでの提供額と報酬返却行動の間には有意な相関が認められず、同一人物であっても状況に応じて利他的行動の発現が変動することが明らかとなった。さらに、自己認知と行動指標を組み合わせると参加者を 6 つのタイプに分類したところ、両者が一貫している者は全体の 38%にとどまり、62%の参加者が何らかの不一致を示していた。これらの結果は、多くの人々が「完全な善人」でも「完全な悪人」でもなく、状況に応じて行動を変化させるグレーゾーンに位置していることを示している。本研究は、人間の道徳性や利他性が固定的な人格特性ではなく、自己概念と状況要因との相互作用によって形成される流動的なものであることを示し、利他性研究および道徳心理学に対して重要な実証的示唆を提供するものであり、今後の研究における理論的基盤としての意義も大きい。